

博物学的関心の深化と人生の転機

和田 健

採集遺物二点と柳田國男の一九〇〇年代

The Development of Kunio Yanagita's Interest in Field Studies and the Turning Point in His Life : Focusing on His Three Archaeological Artifacts and His Life in the First Decade of the 20th Century

WADA Ken

はじめに

- ① 一九〇〇～一〇年における柳田の足跡と採集遺物
- ② 二〇〇年代の大学での講義、講演旅行と交差する採集遺物三点
まとめ

【論文要旨】

本稿では、柳田國男旧蔵考古資料のうち国内で採集したと推測される三点を対象とし、それらを採集するにいたった背景を推認し、柳田の学問的関心と相関させることを目的としたい。この三点の採集時期は一九〇〇年代（以後一九〇〇～一〇年の範囲を示すために「〇〇年代」と記す）と思われる。〇〇年代は、『遠野物語』『石神問答』『後狩詞記』といったいわゆる柳田初期三部作をめぐる博物学的関心を深化させていった時期と位置づけられる。またあわせて大学卒業、農商務省任官、養嗣子、婚約といった人生のさまざまな転機を経験した時期でもある。対象とした採集遺物三点それぞれに貼られた注記ラベルからは、産業組合関係の全国をめぐる講演旅行の過程や早稲田大学で農政学の講義を持っていた時期での採集と読みとれる。〇〇年代は農政官僚と

しての仕事と同時に、『石神問答』に見られる山中共古達との三四通の書簡のやりとり、十三塚への興味関心そして樺太旅行での考古遺物の採集を行った時代の中で、この考古資料三点は捉えることができる。〇〇年代は日露戦争、日韓協約と韓国併合への道筋をたどる、日本が外交上大きなうねりの中にあつた時期ではあるが、この時期柳田自身は官僚として国外、つまり日本の外側に向けた活動よりも、日本の国内、日本列島に住まう人々とその歴史を考える内側への関心を深めていったともいえる。柳田國男旧蔵考古資料は、〇〇年代当時、青壮年期の柳田が深化させていった博物学的関心の一端を垣間見ることができると評価できるのである。

【キーワード】 博物学的関心、一九〇〇年代、養嗣子、初期三部作、産業組合講習会

はじめに

本稿では、柳田國男旧蔵考古資料のうち三点を対象とし、それらを採集するにいたった背景を推認し、柳田の学問的関心と関連させることを目的としたい。この三点の採集が推定されるのは一九〇〇年代（以後一九〇〇～一〇年の範囲を示すために「〇〇年代」と記す）である。この時期の柳田の足跡と関連させることで見られる背景を整理するものとする。

柳田國男を対象とした思想的な研究では、さまざまな人生の結節点において時期的分類の補助線が引かれる。柳田がそのときに何を志向し、そして考えていたのかを対象とする研究は数多あり、補助線の引かれ方として、例えば農政学とその挫折と民俗学の誕生といった見方がある⁽¹⁾。また民俗学誕生を節目に捉える見方もある。民俗学を組織化している柳田とそれ以前の柳田の思想を分析する指標として、山人論や考古学的な興味と総合させて捉え直すという見方もある⁽²⁾。いずれにしても柳田が農政官僚として産業組合に関わる講演会で全国を旅行して回ったのは〇〇年代であり、柳田の思想的歴史においては「初期」で括られる時期である。

そして『後狩詞記』（一九〇九年）『遠野物語』（一九一〇年）『石神問答』（一九一〇年）の初期三部作は、まさに〇〇年代における学問的関心からの成果と刊行であり、あわせて大学卒業、農商務省任官、養嗣子、婚約といった人生のさまざまな転機を経験した年代でもある。そして本稿では多くをふれないが、考古学雑誌に関わる活動そして山中共古とのやりとりそして樺太旅行といった農政官僚としては幅の広い活動を行った時期でもある。産業組合関係の講習会旅行と合わせて、これらの経験をした柳田の〇〇年代は二〇～三〇歳代であったこともあわせて留意した

い。その点に留意して本報告では、〇〇年代に採集したであろうと推測され、地名の手がかりのある注記のある収集遺物三点を考察する。〇〇年代の比較的長期間の旅行の足跡を中心に、郷土研究の母体を作る活動のきっかけになった時期であることを合わせて整理し、彼にとって収集遺物をどのような経緯で手にしたのかを推認し、そしてその持つ意味を検討したい。

① 一九〇〇～一〇年における柳田の足跡と採集遺物

(一) 官僚任官、養嗣子、結婚、講演旅行、信州との関わり

まず本章では「表1」を参照しながら柳田の人生における〇〇年代の足跡を整理しておきたい。すでに柳田の足跡について整理した業績は多数発表されている。その中でも年代順に整理されている『定本 柳田國男集』別巻五（一九六九年）および『別冊 柳田國男伝』年譜（一九八八年）を下敷きにしながら整理しておきたい。

一九〇〇年（明治三十三年）二五歳

この年まだ旧姓であった松岡國男は七月一〇日、東京帝国大学法科大学政治学科卒業する。そして農商務省農務局勤務となり、農政官僚としての生活をスタートさせる。そして九月に早稲田大学で教鞭を取り「農政学」の講義をはじめめる。この農政学の講義は一九〇四年までつづく。そしてこの年の秋には柳田家への養嗣子が決まり、柳田家との往来が始まる。

この年には卒業と任官そして自ら職として志し学んだ農政学的英知を大学の講義で表現する場を持つことになる。さらに養嗣子となる準備が始まり、まさに柳田にとっては、人生の大きな節目となった年であった

表1 柳田國男の1900年代と主な政治的・社会的できごと

西暦	和暦	柳田の年齢	柳田國男の活動(主として旅行を中心に)	おもな政治的・社会的できごと
1900	明治33	25	(7月10日)東京帝国大学法科大学政治学科卒業。／農商務省農務局勤務／秋に柳田家に養嗣子になること決まる。／早稲田大学での講義「農政学」始まる(～1904年)。	治安警察法制定。軍部大臣現役武官制。北進事変。立憲政友会結成。この年資本主義恐慌。
1901	明治34	26	(5月4日)柳田家の養嗣子として入籍するための「引取式」行われる。 (5月29日)柳田直平の婿養子として柳田家に入籍。 (8月)小諸に島崎藤村を訪問。 (11月～12月)農会関係の講習会を目的に信州を縦断する旅行(はじめて飯田を訪れる)。	八幡製鉄所操業開始。
1902	明治35	27	(8月)農事試験場の視察を目的に東北旅行。	
1903	明治36	28	(2月)生家の福崎から山陽・関西方面の旅行。	
1904	明治37	29	(4月9日)婚約中であった柳田直平四女孝(19才)と結婚。	日露戦争・第1次日韓協約。
1905	明治38	30	(1月)水戸,奈良へと産業組合に関する講演旅行。 (8月)8月30日～9月12日,福島県各地産業組合関係の講演ののち,猪苗代湖畔から安曇郡三代村の馬市を見,勢至堂峠を越えて白川へ。(この年旅行による自宅不在日数94日) (9月21日)大学院満期除名の通知。 (10月30日～11月12日)愛知県下産業組合役員協議会に産業組合中央会代表として出席,講演ののち水利組合を見て回る。	日本海海戦・第2次日韓協約(日韓保護条約)。
1906	明治39	31	(8月6～16日)信州旅行。上諏訪一下諏訪一別所一上田一磯部を回り帰郷。 (8月22日～10月20日)東北,北海道旅行そのうち9月12日～10月2日が樺太旅行。	鉄道国有法公布。満鉄設立。関東都督府設置。
1907	明治40	32	(5月19日～6月16日)新潟,山形,秋田,福島を回り産業組合についての講演。 (9月6日～9日)信州・上州旅行。北佐久郡御代田,志賀村そして藤岡一児玉一寄居を経て帰宅。	第3次日韓協約。第1回日口協約。恐慌。
1908	明治41	33	佐々木喜善,柳田に遠野の話始める。 (5月下旬～3ヶ月)九州・四国の旅行。	日米紳士協定(移民協定)成立。
1909	明治42	34	(3月)『後狩詞記』刊行。 (5月25日～7月8日)飛騨,木曾,北陸路旅行を経て生野,辻川(兵庫県,柳田の生家関係)に寄る。	伊藤博文暗殺。
1910	明治43	35	(5月)『石神問答』刊行。 (6月)『遠野物語』刊行。 (12月)新渡戸稲造宅で郷土会開催。	大逆事件。韓国併合。
1911	明治44	36	(3月3日)新渡戸稲造宅で郷土会開催。	工場法公布。第2次条約改正(関税自主権の回復)。辛亥革命。

*柳田のことに関しては『別冊柳田國男伝』年譜,『定本』別巻五の年譜をもとに本文に関わる箇所を整理した。

と思われる。このとき二五歳である。

一九〇一年(明治三四年)二六歳—初めての飯田と長野長期旅行—

この年は柳田にとって信州との濃厚な関わりが始まる年であったといえる。五月四日、柳田家の養嗣子として入籍するための「引取式」が行われ、両親から実娘、孝が國男の許嫁であることを告げられる。このとき孝は一六才である。そして五月二十九日、柳田直平の婿養子として入籍する。柳田國男の誕生である。

そして柳田家のある長野県飯田市への訪問を含めて、一月から二月の間、約四〇日にわたる長野県内の講演旅行を行っている(「地図1」参照)。産業組合関係の講演会、農事講習会であるが、他県と比べて長野県内はほぼくまなく巡回していることがわかる。晩年に記された『故郷七十年』においても「信州の一市十六郡のうち、木曾一郡を残した全県下を草履履きで、しんみりと歩いたことを覚えている」と記している⁽³⁾。その行程について以下「地図1」に記した番号とあわせて長野県内の旅行について、その足跡を簡条書きしたい。なお以下に示す柳田の行程に関わる日付や記述は先に記した『別冊 柳田國男伝年譜』を下敷きに簡条書きし、現在の行政町村名を括弧で記した。また筆者による加筆や他資料による関連する記述は註の方に記載することとした。

- (二月一日) ①足利を発ち長野着⁽⁴⁾。長野県農会第四回総会で講話。
- (二月四日) 長野市城山館⁽⁵⁾において「産業組合に付て」を講演。
- (二月五日) ②長野を立ち北須坂(現在…須坂市)に向かう。
- (二月六日) ③下高井郡中野(現在…中野市)に行き、④湯田中(現在…下高井郡山ノ内町)の温泉に一泊する。
- (二月七日) ⑤飯山(現在…飯山市)着。
- (二月八日) ⑥豊野(現在…長野市豊野町)から汽車で長野に帰る。

(二月二〇日) ⑦埴科郡屋代(現在…千曲市)に泊まる。

(二月三日) ⑧南佐久郡白田(現在…佐久市)泊。

(二月四日) ⑨早立、本牧村(現在…佐久市、その前段階の旧町名は北佐久郡立科町)までの五里は人力車、それから中山道を歩き、笠取峠(北佐久郡立科町と小県郡長和町との境)を越え、⑩和田(現在…小県郡長和町)に泊まる。

(二月五日) ⑪下諏訪(現在…下諏訪町)まで六里あまりを歩き⑫上諏訪(現在…諏訪市)に泊まる。

(二月七日) 杖突峠(伊那市高遠町と茅野市の境界)を越え⑬高遠(現在伊那市)着。

(二月八日) ⑭坂下(現在伊那市)へ向かう。

(二月九日) 坂下より⑮飯田(現在…飯田市)着⁽⁶⁾。

(二月三〇日) 飯田繭市場で産業組合に関する講演を行っており、一八〇名の聴衆が参加するという盛況ぶりであった。飯田で安東家(直平母方(安東菊子)の親族)のやかいかいとなり、松山伯母などに会う。暮参など三日を過ぎす。

(二月二日) ⑯大平峠(南木曾郡南木曾町と飯田市の境)を越え木曾に向かう予定であったが、悪天候のため断念。

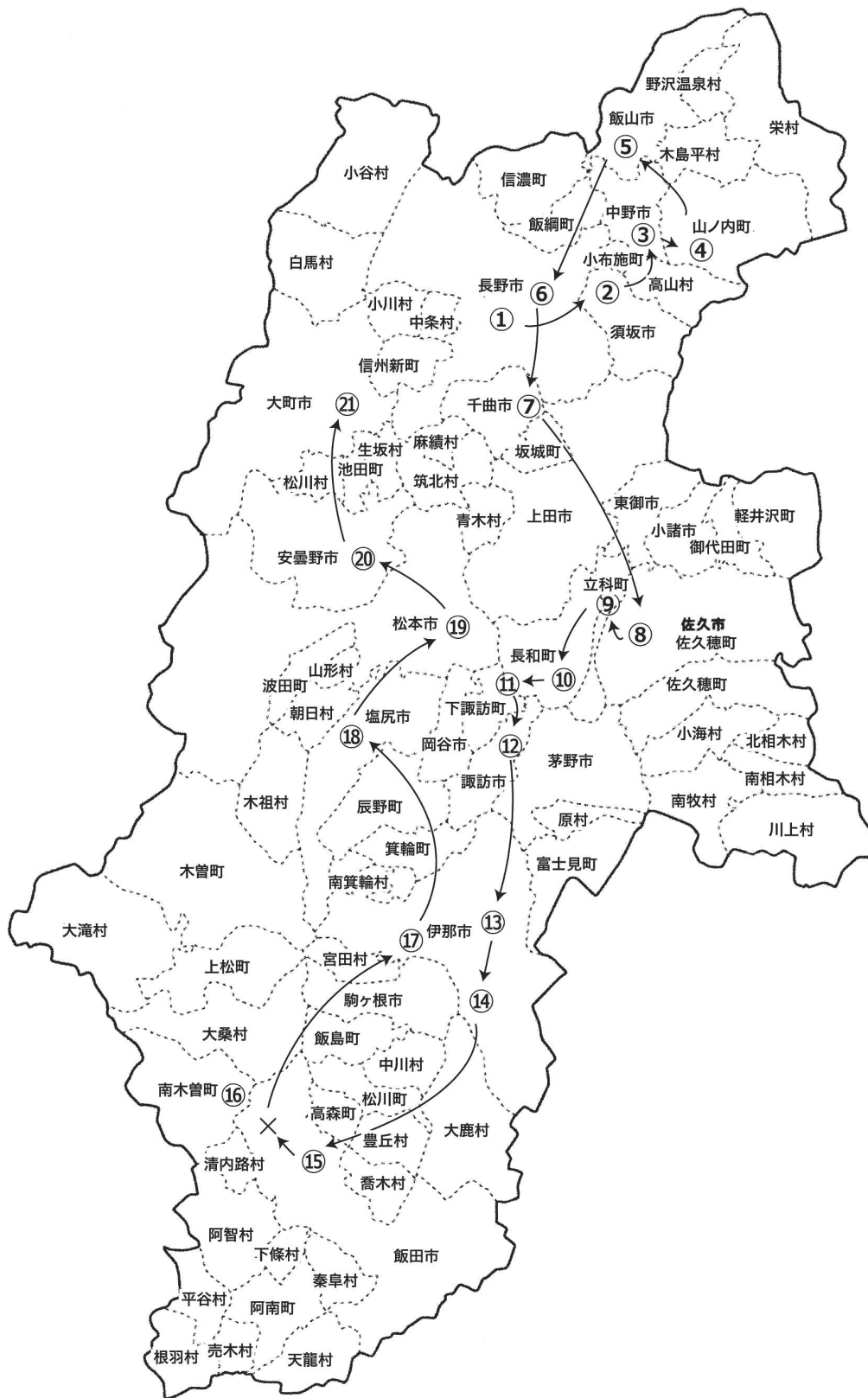
(二月三日) ⑰坂下(現在…伊那市)に戻る。

(二月四日) ⑱塩尻(現在…塩尻市)、⑲松本(現在…松本市)を経て浅間温泉に泊まる。

(二月七日) 松本を立ち⑳豊科(現在…安曇野市)着。

(二月八日) 豊科を立ち㉑大町(大町市)に向かう。この旅の帰途、小諸に立ち寄り島崎藤村と会う⁽⁷⁾。

(二月一〇日) 長野における講演を終える。



地図 1 1901 年柳田國男の長野旅行の行程

ここまでの長野県内の旅行は、大平峠を越えることができず県内南西部の南木曾郡方面には出向くことはできなかったが、「地図上」でみるかぎり北は現在の飯山市、南は飯田市にいたって南北全域にわたっている。そして飯田で三日間を過ごしたことから、これから柳田が交流し深める伊那の郷土教育そして松本での胡桃沢勘内氏との出会いを含めて、他の地方をめぐる講演旅行とは少し趣が違う長野における郷土教育活動の第一歩となったといえる。

一九〇二年(明治三五年)二七歳〜一九〇四年(明治三七年)二九歳―つづく
講演旅行、ひろがる活動と博物学的関心―

柳田は一九〇二年、東北を中心に講演旅行を行っている。八月八日(二三日(東北旅行) 農事試験場などを視察して、宇都宮―郡山―若松―山形―高湯(福島市)―青根(宮城県柴田郡川崎町)―仙台―ノ関―中尊寺―平(福島県いわき市)と移動している。

この年の柳田はさまざまな分野を横断する幅広い活動を行っている。例えば社会政策学会において、横井時敬、持地六三郎、葛岡信虎とともに鉱毒事件調査委員会委員となる(『別冊柳田国男伝』一一頁)こと、田山花袋、国木田独歩との交流、そして先述した早稲田大学での農政学講義などがあげられる。

一九〇三年の講演旅行では、西日本を中心に講演旅行に行くと同時に生家も訪れている。以下旅程を見ていくと、二月一四日 小作争議視察のため岡山県北部へ出発して、二月一五日姫路着。そして生家である辻川(現在・兵庫県神崎郡福崎町)に行き、氏神と墓に参っている。さらに二月一六〜一九日には岡山―津山―勝田―倉敷を歩き、二一日には高松で講演、そして二二日には岡山県笠岡の古墳を見る。この間、移動時間短く講演し、さらに生家訪問そして古墳の見学を行っているところが、柳田のこの時期の生活そのものや学問的関心を象徴している行動である

ように見えるのである。⁽⁸⁾

そして一九〇四年四月九日にかねてより婚約中であった柳田直平四女孝(一九才)と結婚する。

日露戦争が始まるこの年までに、柳田は卒業、任官、養嗣子、さらに農政に関わる官僚としての活動、農政学の大学で教鞭を執りそして結婚を迎える〇〇年代前半を過ごすのである。この年、柳田は三〇歳である。

一九〇五年(明治三八年)三〇歳―福島、愛知三河旅行―

この年農商務省の嘱託として出張が命じられて、八月三〇日〜九月二日の間、福島県内各所で産業組合関係の講演を行い、猪苗代湖畔から安積郡三代村(現在安積郡湖南村)の馬市を見学して、勢至堂峠を越えて白河へ向かっている。この道筋に関しては、会津地方から中通りにかけて、現在の国道二九四号に沿った行程が想像され、県内の西から南西にかけての移動のように思えるが、県内全域での産業組合関係の講演を行っていることから具体的な講演場所の特定はできないが、広く県内を巡回していることは想像できる。この年は旅行による自宅不在日数九四日とあり、一〇月三〇日〜十一月二日に愛知県下産業組合役員協議会に産業組合中央会代表として出席、講演ののち水利組合を見て回り、三河から遠江、引佐郡、磐田郡、安倍郡を経て帰京している。

一九〇六年(明治三九年)三一歳〜一九〇七年(明治四〇年)三二歳―信州、東北、北海道への巡回そして樺太旅行―

一九〇六年柳田は樺太視察旅行に出向いており、本共同研究で対象としている旧蔵考古資料もその旅程で入手したものが多く含まれている。樺太での採集遺物の分析は、本共同研究関係者の分析にゆだね、ここでは旅程を年譜から拾い上げたい。まず八月六〜一六日には信州へ旅行をしている。旅程は「上諏訪―下諏訪―別所―上田―磯部(千曲市)を回

り帰京」とあり、長野県の中央部を北上縦断しながらの移動が伺える。そしてその約一週間後、八月二二日～一〇月二〇日 東北、北海道旅行に出向いている。そのうち九月二二日～一〇月二二日が樺太旅行である。八月二四日には盛岡そして小岩井農場（岩手郡雫石町）に出向いている。東北地域の具体的な巡回地名はこの二つのみの記述だが、東京から札幌までで一週間の移動であることから、広域を隈無く巡回するには厳しい日程に思われる。八月二八日～九月九日には札幌、室蘭、夕張、釧路、帯広、旭川、札幌、小樽を農事試験場、牧場などを中心に回り、九月二二日～一〇月二二日の期間、樺太視察旅行に出かけている。

一九〇七年も引き続き、東北、新潟そして信州、上州旅行を中心に回っている。五月一九日から六月一六日の一ヶ月は「新潟、山形、秋田、福島を回り産業組合についての講演」をし、九月六日から九日は信州・上州を回っており、北佐久郡御代田（現在、御代田町）、志賀村（現在、佐久市志賀）から上州に抜け藤岡（現在、群馬県藤岡市）、児玉⁹⁾、寄居（現在、埼玉県大里郡寄居町）を経て帰宅とある。

一九〇八年（明治四二年）三三歳～一九〇九年（明治四二年）三四歳―九州、四国旅行そして『後狩詞記』―

樺太から戻った翌年の一九〇八年、九州、四国の旅行におよそ三ヶ月（五月二四日～八月二二日）出かけている。柳田曰く「内地における私のいちばん長い旅行であった」（『故郷七十年』）と記している¹⁰⁾。またこの旅程で得たことをもとに翌年『後狩詞記』につながっていることはよく知られていることである。以下定本の年譜に基づいて行程を記したい。

「六月二日 熊本、阿蘇男爵に招かれて、古文書と名物を見る。一日 八代、一二日 熊本県会議事堂で「農界の危機」を講演。一六日 球磨郡五木村↓人吉市。」と熊本県内山間部を旅している。そして「二〇日 鹿児島報徳会で講演。二二日～二九日 鹿児島県下巡回（重富↓蒲生

村↓宮古城村↓西市来村↓下伊集院村苗代川↓伊作村↓世田↓枕崎↓穎娃村（南九州市）↓指宿）」と鹿児島県内を広く周遊したのちに七月一三日に宮崎県椎葉村を訪れている。「東京の人間で椎葉村に入ったのは私が最初のようにいわれたが、ともかくいたるところで歓迎を受けた」（『故郷七十年』）とあり、椎葉村村長も羽織袴で迎え柳田も紋付き袴であったことは柳田の旅行における見聞をする姿として象徴的な表象として扱われるところでもある。このうち大分、広島、四国と周遊して帰京している。

一九〇九年には長女三穂出生が出生、そして三月一日には『後狩詞記』を出版している。長期の旅行では、五月二五日から七月八日まで飛騨、木曾、北陸路の視察旅行と生野そして辻川と柳田の生家関係を回っている。

（二）〇〇年代の講演旅行をめぐる重層した博物学的関心の展開

ここまで〇〇年代の柳田の長期旅行と主として人生の転機にあたるできごとを絡ませながら概観してきた。産業組合を中心とした農政に関する講演旅行、初期三部作刊行に至る諸資料との出会いと思考など、種々の関心を挙げ、博物学的関心が深化した時代である。加えてこの〇〇年代では信州との関わりのはじまりであることも大きい。柳田と信州との関わりに関してもまた数多研究業績が蓄積され手広く渉獵する必要もあるが、この〇〇年代に限っては胡桃沢友男氏の『柳田國男と信州』と伊藤純郎氏の『柳田國男と信州地方史 「白足袋史学」と「わらじ史学』』と関連させて〇〇年代の意味づけを行いたい。ある意味でこの二著作が柳田の〇〇年代を考えるきっかけとなるのではと筆者は思えたからである。

胡桃沢友男氏はのちの柳田に師事した胡桃沢勘内氏の子息である¹¹⁾。勘内氏は松本に住まい、のちに信州の郷土研究の草分けとなっている。こ

これまで年譜などに整理された長期旅行においても信州の旅程が詳細なのは、柳田自身が『東国古道記』に行程を記されていることもさることながら、同著書の記述によるものも大きい。⁽¹²⁾一九一〇年代以降、信州特に伊那を中心に柳田は信州の郷土研究と関わり、そして伊那民俗研究会、信濃教育学会と郷土研究および教育の基盤が作られていく。その前段階での接点が〇〇年代であることがこの著作からも伺える。

また伊藤氏の著作にある副題「白足袋史学」は、椎葉村で柳田を迎えた村長そして柳田自身の紋付き、白足袋であった姿を表象して名付けられている。こちらは伊藤氏による柳田の郷土研究に対する命名で「ムラにまなざしをむけ、あらゆる資料に目配りをしてムラを歩きながら、「旅人」の目から「郷土人」の目が変わることなく、ましてムラの実態にまでまなざしがおよばず、いわば「白足袋」でしかムラを歩けなかった柳田の郷土研究」〔伊藤二〇〇四年 はしがきvii〕という意味合いを持って使用している。

いっぽう「わらし史学」は、例えば信濃史学会の基礎を作った栗岩英治氏の郷土調査（自ら現地を訪れ、文献資料だけでなく、非文献資料、考古遺物、民俗資料にも目を配ったということ）、「わらしを履いた史学者」による「わらし史学」と対照的にとらえ、長野の郷土教育がどう信州の教員の中で展開したかを、幾多の信州の研究者を題材に記された著作である。

この時期の柳田の旅によって得た学的関心とその方法と、信州でこののち育った郷土教育的関心や方法はいちがいに優劣では括れないが、信州における郷土教育の萌芽的な段階に、柳田もまた人生の転機を迎える中でさまざまな伊那の研究者、教育者と交差した〇〇年代であったことは間違いない。

② 〇〇年代の大学での講義、講演旅行と交差する採集遺物 三点

本章では「柳田國男旧蔵考古資料 八二点」の中で、「(一) A-624-1-2 (打製石斧)」「(二) A-624-1-3 (磨製石斧)」そして「(三) A-624-2-2 (書付和紙)、A-624-2-3 (剥片)、A-624-2-4 (自然小礫)」の三点を対象に、柳田がこれらを採集した背景を推し量りたい。この三点は国内で何かしらの経緯で採集されたと思われる遺物である。また遺物そのものに貼られたラベルや書付和紙から柳田自身の筆跡と見られる注記が記されていることから、ここまで概略を整理してみた〇〇年代における柳田の活動の中で採集遺物の経緯を推定してみることとする。

(一) A-624-1-2 (打製石斧) について

「A-624-1-2 (打製石斧)」は「写真1」のように赤い枠のラベルが貼られ注記されている。注記は三行縦書きで記されているが、一行目の上部そして二行目の真ん中が剥がれて欠けている。ただ一行目の「伊那」「下川路」の文字は鮮明に見え、また上部の欠けているところも「信



写真1 A-624-1-2(打製石斧)

の文字は読める。二行目は欠けている箇所はすぐ下は不鮮明だが「今」の文字と思われ、そしてはつきりと「村」と読め、その下は「原山」の文字が見える。三行目は「上柳」と鮮明に読める。はつきりと読める箇所を記すと、

信「」伊那、下川路

「」「今？」村「」原山

上柳

となる。

「下川路」から考えると、現在の飯田市川路「地図2」で旧下川路村の範囲での採集であろうと思われる。また不鮮明だが、村の前の字が「今」であるならば、字今村の可能性も否定できないが、確定するには躊躇する。また鮮明に読める「原山」「上柳」は長野県立歴史館がホームページ上で公開している「長野県の遺跡」にある遺跡リスト中からは、このふたつの名称がかかった遺跡名や字名は飯田市川路圏内では見つけられなかった。しかし旧下川路村圏内「地図2」であることを前提に、「今？」村という文字に着目したならば、下川路圏内の天竜峡駅近くが「今村」の字名であり、この周辺での採集の可能性が推定できる。

そこで先述した柳田の長野県、特に飯田市に出向いた旅行を記すと、

（ア）一九〇一年の旅行

はじめて飯田に来たときで、また長野県一帯を「信

州の一市十六郡のうち、木曾一郡を残した全県下を草履履きで、しんみりと歩いたことを覚えている」「故郷七十年」と記したことや飯田から大平峠を越えて南木曾方面に向かう予定で引き返したことから、柳田が直接下川路方面に向いての採集かどうかは判別しがたい。

（イ）一九〇六年の旅行

定本および別冊柳田國男伝の年譜にも「上諏訪―下諏訪―別所―上田―磯部を回り帰京」とあり、上諏訪から北上しながら長野県内を移動し



地図2 飯田市内旧下川路村圏内(国土地理院2万5千分の1地形図「時又」)

あくまで仮説ではあるが、「村」の前が「今」と読めるならば、下川路圏内で今村とよばれるところは現在の飯田線天竜峡駅西側付近となる。

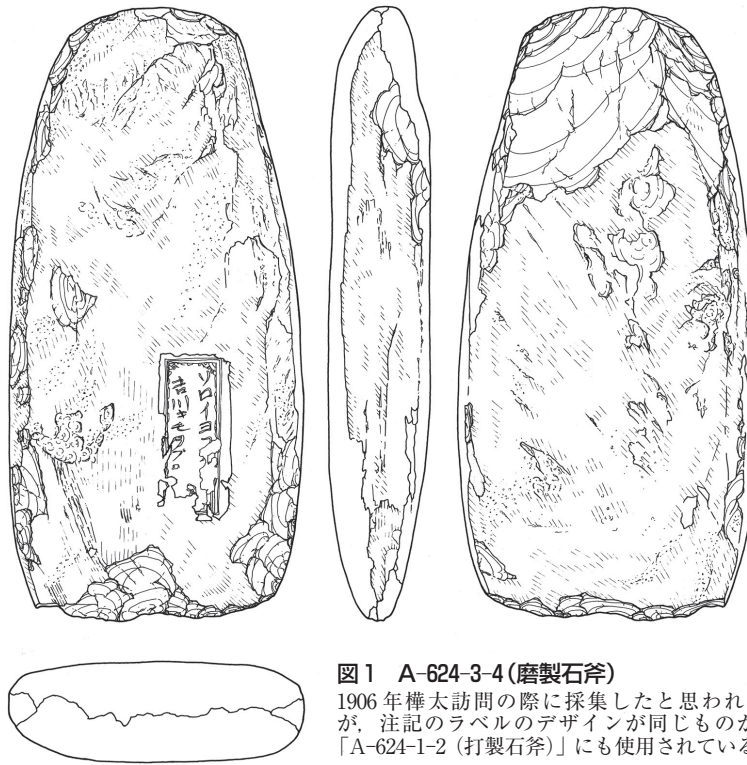


図1 A-624-3-4(磨製石斧)
1906年樺太訪問の際に採集したと思われるが、注記のラベルのデザインが同じものが、「A-624-1-2(打製石斧)」にも使用されている。

東京に戻っていることから、下伊那にあたる飯田(旧下川路村方面)は立ち寄る道筋とはいえない。ただし、この年は樺太旅行を行っており、その樺太でも考古遺物を採集していることから「図1参照」、石斧のような遺物に関心は高かった時期とも考えられる。

(ウ)一九〇七年の旅行

同様に年譜には「北佐久郡御代田、志賀村から上州に抜け藤岡、児玉、寄居」とあり、長野県内東部から群馬県へと抜けていく行程である。こ

の限りにおいては、下川路方面に出向いていない可能性が高いのだが、完全に否定もできない。

〇〇年代に限らずこの他にも飯田方面に出向いてはいるが⁽¹³⁾、同じ注記ラベルの杵の模様の遺物(例えば「A-624-3-4」など)が樺太旅行での採集遺物のもと同系統であることから、おそらくは〇〇年代の採集であることは推し量られる。そうすると、同じデザインの注記ラベルとなると、イあるいはウの時期、一九〇六〜一九〇七年に出向いたときの採集であるとするのがもっとも可能性としては高いように思えるのである。

(二) A-624-1-3(磨製石斧)について

「A-624-1-3(磨製石斧)」は「写真2」にあるように注記ラベルが貼られているが、先の「A-624-1-2(打製石斧)」と違い、杵の模様がないうラベルである。注記は三行だが、右上部が欠け一行目の上部部分が欠けている。一行目最初に判読できる文字が「郡」そしてその下に



写真2 A-624-1-3(磨製石斧)

見えるのが「下戸塚」である。二行目のひと文字分は欠けていることもあり、「○田馬場」であることと三行目の「水稻荷境内」とはつきり読み取れることから、水稻荷神社を指しているとみられ、二行目の欠けている箇所あわせて「[高]田馬場」「水稻荷境内」と読み取れる。現在の早稲田大学のある周辺（高田馬場一〜三丁目、西早稲田一〜三丁目）は一九七五年新宿区戸塚町であった。下戸塚は一八八九年の町村制施行により戸塚村に編入されている。この当時の戸塚村は南豊島郡である。ただしその後一八九六年に豊多摩郡になっていることから、左一行目の欠けている箇所は「[豊多摩]郡」と推定される。したがって

「豊多摩」郡下戸塚

「高」田馬場

水稻荷境内

となると考えられる。

ただし、現在の水稻荷神社「写真3」は早稲田大学と換地を行い、一九六三年に遷座、現在の西早稲田三丁目にある。もとよりあった水稻荷神社は、現在の西早稲田一丁目付近、早稲田大学九号館裏のあたりに該当する「写真4」。ここは天台宗覚王寺とも接してい



写真3 現在の水稻荷神社



写真4 早稲田大学早稲田キャンパス9号館裏側
(天台宗覚王寺から撮影)

る場所であり、東京都遺跡台帳によるとその九号館付近の遺跡は「西早稲田一丁目遺跡」（遺跡番号九八）に該当する。現在の早稲田キャンパス九号館近くと推定できる（「地図3」参照）。柳田は早稲田大学で一九〇〇年から一九〇四年まで農政学の講義を行っている。おそらくこの時期にもこの水稻荷神社の敷地内で採集したものでないかと推定されるのである。



地図3 早稲田大学9号館と現在の水稻荷神社の位置

(国土地理院発行2万5千分の1地形図「東京西部」)

1が早稲田大学9号館、2が現在の水稻荷神社。1にかつて水稻荷神社があり、そこで採集されたものと思われる。

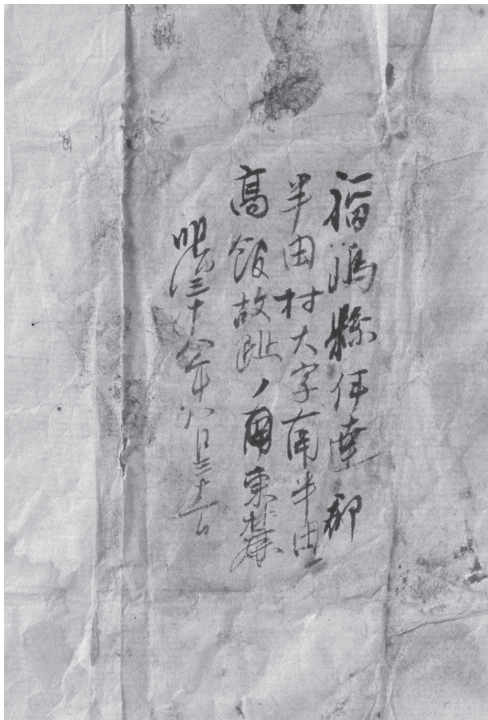


写真5 A-624-2-2(書付和紙)

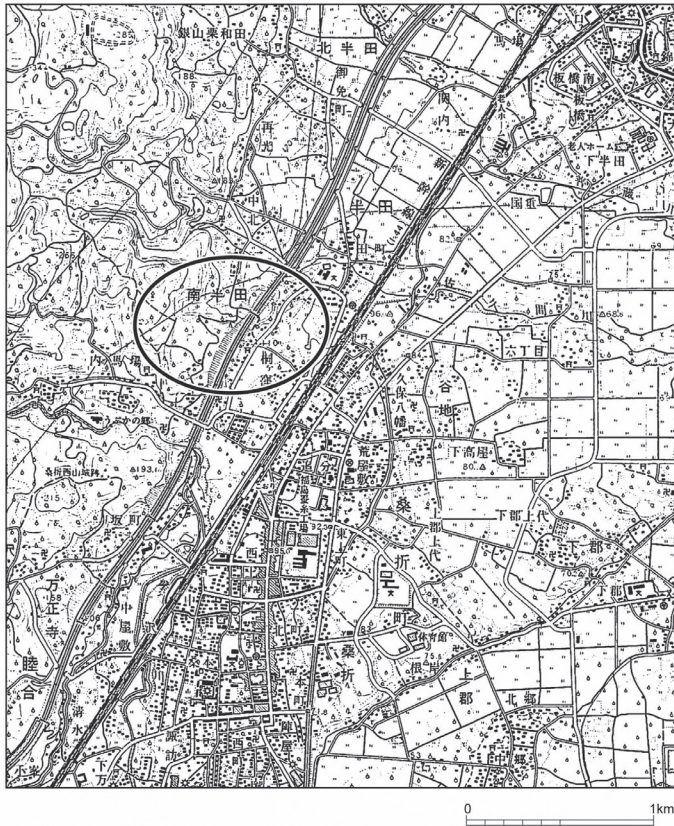
伊達郡半田村は現在の伊達郡桑折町に該当する(「地図4」参照)。先

福島縣伊達郡
半田村大字南半田
高飯故址ノ南東麓
明治三十八年

三十八年」と記されている。

先の二つは石斧であるが、こちらは「A-624-2-3」は剥片、「A-624-2-4」の自然小礫の小さいものである。採集時期として推測されるのがこれらの遺物を包んでいた「A-624-2-2」の書付和紙(写真5)である。文字は四行にわたり鮮明に読み取れる。そこに「明治

(三) A-624-2-2(書付和紙)、A-624-2-3(剥片)、
A-624-2-4(自然小礫)について



地図4 福島県伊達郡南半田地区周辺

(国土地理院発行2万5千分の1地形図「桑折」)
南半田圏は南東部中心になだらかな傾斜地となっている。遺跡の場所は特定できないがこの傾斜付近での採集ではないかと推定される。

述した柳田の講演旅行ではこの年(一九〇五年)に農商務省の嘱託として八月三〇日から九月一二日にかけて福島旅行を行っている。ただし年譜にある地名としては「勢至堂峠を越えて白河へ」なので、この道筋に關しては、会津地方から中通りにかけて、県内の西から南西にかけての移動のように思えるので、半田村は白河より北側約八〇キロ先にあり道筋からすれば外れるのではあるが、福島県内全域での産業組合関係の講演を行っていることから具体的な講演場所の特定はできないが、広く巡回している中で半田村への訪問と採集であったのではと推定される。南半田の遺跡であることは書付からは明確ではあるが、現在桑折町で登録されている遺跡台帳データベースの中には大字南半田圏内にある一四の遺跡からは「高飯」の名称や小字の地名にあたるものはなかった。

現在の遺跡名からは特定しがたい。ただ南半田地区南東部は緩やかな傾斜地であり、その圏内での採集ではなかったかと推測されるのである。

まとめ―博物学的関心が深化する「柳田國男の〇〇年代」と採集遺物の関わり―

ここまで柳田が〇〇年代に全国を回った講演旅行の行程と人生の転機にあたるできごとを絡めながら、柳田旧蔵考古資料の三点について検討してきた。これら三点の遺物は、決して歴史上特筆すべき考古資料とはいえないが、柳田の筆跡とされる注記があり、本人にとって何かしらの問題意識、関心があったと推定できることから、その採集の背景について検討を試みた。

ここまで概略したように、柳田の〇〇年代を以下のように整理してみたい。

- ・産業組合、農会関係の講演旅行と人生で関わりのある場所(生家である兵庫県神崎郡福崎町、養子先実家の長野県飯田市など)への訪問。
- ・農政官僚としての活動と共に進んだ早稲田大学での農政学の講義
- ・人生の転機(任官、養嗣子、結婚、長女出生)を経た青年期
- ・柳田初期三部作(『後狩詞記』『石神問答』『遠野物語』)に關わる考察として刊行。

この四点に留意して旧蔵考古資料との関わりで簡略ながらもまとめしてみたい。

まず採集時期については福島県伊達郡半田村(現・桑折町)

注記の「A-624-2-2（書付和紙）」に「明治三十八年」（一九〇五年）であること、そして樺太旅行で採集された考古遺物は一九〇六年であることに関連して樺太での採集遺物に貼られた注記ラベルと同系統のものが長野県下川路村（現飯田市）注記の「A-624-1-2」に貼られていることから、これらはほぼ同時期、〇〇年代の半ばあたりに採集したものと考えられる。また水稲荷境内の注記のある「A-624-1-3」も一九〇〇～〇四年の間での早稲田大学への出講時期での採集であることは濃厚であることから、一九〇〇～〇六年において、柳田の考古遺物への関心が高まっていたことは推測される。

『石神問答』に見られる山中共古達との三四通の書簡のやりとり、『考古界』にはじめて投稿掲載された「十三塚」が一九一〇年であることから、本稿で対象とした考古遺物三点および樺太旅行で採集した考古遺物含めてほぼ同じ時期に柳田が考古学的関心を展開していたことが伺える。⁽¹⁴⁾

〇〇年代はさまざまな学問知と本来の農政官僚としての仕事そして養嗣子、結婚といった人生の転機が訪れている時代の中で、樺太旅行での考古資料と上記三点の考古資料はまったく同じ時期に収集されたものである。〇〇年代は日露戦争、日韓協約と韓国併合への道筋をたどる、日本が外交上大きなうねりの中にあつた時期でもある。しかしこの時期、柳田自身は官僚として国外、外側に向けた活動よりも、日本の国内、日本列島に住まう人々の歴史の方に関心、焦点を持つ、いわば日本の内側への関心を深めていった中ででの行動であることはよくわかる。考古遺物の採集はその当時の柳田の博物学的関心による活動ともいえる。

一九一〇年代から先の活動は、新渡戸稲造達との郷土会開催、つまり広範囲にわたる専門分野の識者による研究会活動から、会誌『郷土研究』への接続、そして特に信州そして伊那を中心とした郷土教育の活動への関わりと展開する。柳田にとって〇〇年代は、そのような一九一〇年代の活動が展開する前段階の、博物学的関心が萌芽し拡大していく時期で

あつたとも意味づけられる。柳田研究においては初期にあたる時期ではあるが、その中でも〇〇年代における考古遺物採集は、柳田の青壮年期の関心がかがえる資料であると意味づけることができる。

また筆者の見立てに過ぎないが、上記四点にあげた人生の転機とは別に、のちに示した「民俗資料の分類」（『郷土生活の研究法』に収録）との関わりについても末尾ではあるが記しておきたい。柳田は民俗資料を「有形文化」「言語芸術」「心意現象」の三つの部門に分類し、民俗資料における目と耳そして感性を通じた観察の道筋を説いている。このことを柳田が示したのは一九三二～三三年の間のことである。この民俗資料の中で示した「有形文化」は、他の二つの部門よりも紙幅を割いており、順に項目立てをあげると、「(一) 住居、(二) 衣服、(三) 食物、(四) 交通、(五) 労働、(六) 村、(七) 連合、(八) 家、(九) 親族、(一〇) 婚姻、(一一) 誕生、(一二) 厄、(一三) 葬式、(一四) 年中行事、(一五) 神祭、(一六) 占法、(一七) 呪法、(一八) 舞踊、(一九) 競技、(二〇) 童戯と玩具」となり、多岐にわたっている。⁽¹⁵⁾ 紙幅を割いているのは、観察の視点が多岐にわたるため項目が多くなったからであろう。もちろんこの分類は民俗資料におけるもので、考古遺物に関しては直接に当てはめて考えることはできないが、旅人の視点つまり村の外から見た人間の観察視点として「目に映ずるもの」をいかに意識的に広く観察するかを示したものといえる。柳田自身は〇〇年代、産業組合講習会など日本各地を旅で回りながら、さまざまな「目に映ずるもの」からの博物学的な観察視点を熟成させ、それによる経験的な知を蓄積させていったことは想像に難くない。〇〇年代における柳田が採集した考古資料は、民俗資料といった認識分類とは別に文書資料とは別の角度から見ると大きく捉えた観察のもと集めたのではないか。つまり残された柳田旧蔵考古資料は、遺物の表採―もつとも表採ではなく旅先で他人から譲り受けたことも想定はされるが―を通じて、ほかの民俗資料として認識する

ものも含め、博物学的関心のなかで「目に映ずるもの」を総合的に捉えていた足跡と位置づけられるのではないか。少しうがった見方かとは思いますが、柳田の人生における〇〇年代は、「有形文化」の捉える術を見出していく転機としても捉えることができ、その過程の中に講演旅行があり、遺物採集があったという見取りもできるのではないかとも思うのである。

註

- (1) 柳田にとって農政学との関わりを挫折と捉えるのが妥当かどうかは意見の分かれるところではある。しかし、そのような評価とは別に「農政学」との関わりの中に「民俗学」の誕生へと連続している見方はさまざまな柳田学を研究する識者にとつてはある程度共通している見方である。その意味では柳田の思想を見る観点に彼の人生経験、興味関心などを絡ませてみることは妥当な見方である。例えば後藤総一郎氏は「その誕生から死にいたるまでの、体験と生活と営為のすべてが注がれて創造され構築されたのが、柳田学であった、という感慨が強い。」〔後藤一九七六年八頁〕と総括しているところからも、柳田のライフステージを補助線として考察する方法といえる。
- (2) 柳田の思想を捉えるときに、柳田自身の人生を時期的に区分して捉え直そう見方は多い。例えば赤坂憲雄氏は柳田の思想の流れについて柳田の人生全体を「初期・前期・後期」と区分し、前期以前を民俗学以前とする見方から柳田のテキスト群を読み取る方法を示している〔赤坂一九九四年二三頁〕。
- (3) 引用は『定本 柳田国男集』別巻三〔一九七一年一七二頁〕に依った。
- (4) どのような行程で柳田が移動したかは今後の史料研究の中でより明らかにされることであろうが、ここでは推測の域であることを御寛恕賜りたい。一九〇一年の段階では足利からは日本鉄道となった両毛線が桐生、前橋まで接続し、高崎まで開通している。そして高崎からは官設鉄道であった信越本線が横川、軽井沢間も開通しているので、柳田の長野までの行程は以上の行程での鉄道利用であったと思われる。
- (5) 城山館は長野市に一八八七年に作られた公会堂である。後の憲政護憲運動などの集会などで使われた場所である。
- (6) 初めての飯田の訪問については柳田による『故郷七十年』『東国古道記』のほか、飯田との関わりでの研究では後藤総一郎氏の「柳田国男の経済思想 民俗学と農政学の間」〔一九七六年八一―二六頁〕および村沢武夫氏「柳田国男と飯田」〔一九七六年二三―二九頁〕にも詳しい。いずれも『伊那民俗研究』による特集号である。また時を経て同誌には一九九〇年、福田アジオ氏、篠原徹氏による柳田のご子息為正氏へのインタビューによる飯田との関わりを明らかにしたものが公開されている。
- (7) 単純に地理的な行程だけを考えた場合、豊科から大町までの最短距離で小諸を経由するのは迂回する経路となる。どのような周遊となったかは当時すでに開業していた篠ノ井線、信越本線での経路が想像されるが、十分に経路を確定するだけの根拠はないので、「地図1」に記した②から②への矢印は小諸を経由しないで記すこととした。
- (8) 以下年譜では、「三月一日 同県伊里村穂浪の正宗家に遊ぶ。三月三日 大阪で博覧会を見物。三月一日 奈良月ヶ瀬に遊ぶ。」と記されており、岡山から関西圏までの短い移動期間で旅行していることが伺える。
- (9) 「兄玉」は現在の埼玉県児玉郡か旧児玉町（現在の埼玉県本庄市）を指すのか特定しがたいので、本文中に現在の行政名は入れていない。
- (10) 引用は『定本 柳田国男集』別巻三〔一九七一年一七四頁〕に依った。
- (11) 本書の著者名は勘内氏の子息である友男氏だが、本全体の構成に関わり、はしがきを記したのは友男氏の子息勘内氏である。
- (12) 信州旅行の詳細についても、柳田が飯田の親族宛に（大町から）書いた手紙が収録されている。本書は柳田の講演旅行などで全国の他の地域よりも詳細に理解できる一助になっている側面も合わせて持つといえる。
- (13) 川路との関わりというならば、一九二六年（大正一五年）に民俗の会（のち一九三二年（昭和七年）に伊那民俗研究会に名称変更）が発足したときの中心メンバーが中島繁男氏、牧内武史氏、熊谷翁氏であり、川路村在住の「川路農民美術組合」のメンバーであることがあげられるが、樺太で採集した遺物と同じ種類の注記ラベルであることから、可能性としては低いと考えている。
- (14) 佐野賢治氏は石神問答や十三塚考などを収録した文庫版の解説で、明治四十三年（一九一〇年）を「柳田国男の生涯と民俗学の形成にとって、明治四十三年はひとつの画期であった。」〔佐野一九九〇年五六三頁〕と述べている。石神問答の刊行、民俗学的思考の萌芽、郷土会の設立のなかで一九一〇年をひとつの転機として捉えているが、その前段階における〇〇年代は国内および樺太での考古遺物の採集であったと合わせて意味づけることはできよう。
- (15) 引用箇所「民俗資料の分類」は、刀江書房版および一九七〇年刊行の『定本 柳田国男集』第二五巻筑摩書房版には収録されていなかったため、文庫版九九―一八九頁に依拠した。文庫版解題によると「民俗資料の分類」は村落社会学会委嘱によって柳田が昭和七年一月から八年八月までにかけて行われた口述を小林正熊氏が整理したものを、一九六七年に筑摩書房により増補版で出て以

降収録されたという〔柳田一九九〇年六四五頁〕。

参考文献

- 赤坂 憲雄 『柳田国男の読み方―もうひとつの民俗学は可能か―』ちくま新書 一九九四年
- 伊藤 純郎 『柳田国男と信州地方史「白足袋史学」と「わらじ史学」』刀水書房 二〇〇四年
- 胡桃沢友男 『柳田国男と信州』岩田書院 二〇〇四年
- 後藤総一郎 『柳田国男と飯田』（柳田国男研究所運営委員会編・発行『伊那民俗研究』第一巻）一九九〇年
- 後藤総一郎 『柳田国男の経済思想 民俗学と農政学の間』（『伊那』第二四巻一号 八一―一六頁 伊那文化研究社）一九七六年
- 後藤総一郎監修 柳田国男研究会編著『柳田国男伝』別冊 柳田国男伝 三一書房 一九八八年
- 佐野 賢治 「解説」〔柳田国男〕『柳田国男全集一五 石神問答 大白神考ほか』ちくま文庫 一九九〇年
- 篠原徹、福田アジオ 「特別インタビュー 柳田国男と柳田家―柳田為正氏インタビューの記録―」（柳田国男研究所運営委員会編・発行『伊那民俗研究』第一巻 一九九〇年）
- 定本柳田国男集編纂委員会編 『定本柳田国男集』別巻五新装版 筑摩書房 一九七一年
- 柳田 国男 『郷土生活の研究法』刀江書房 一九三五年（柳田国男『柳田国男全集』第二八巻 ちくま文庫 一九九〇年）
- 柳田 国男 『東国古道記』郷土研究会 一九五二年（柳田国男『定本柳田国男集』第二巻 筑摩書房 一九六八年）
- 柳田 国男 『故郷七十年』じぎく文庫 一九五九年（柳田国男『定本柳田国男集』別巻三 新装版 筑摩書房 一九七一年）
- 柳田国男記念伊那民俗学研究所編 『柳田国男と飯田 まこと君の一研究』飯田市教育委員会 一九九六年
- 牧田 茂 『柳田国男』中公新書 一九七二年
- 箕原 泰彦 『柳田国男旧蔵考古遺物入手のいきさつについて』〔私家版〕
- 村沢 武夫 「柳田国男と飯田」（伊那史学会『伊那』二四巻一号 二二―二九頁 伊那文化研究社）一九七六年

（参照 URL）

長野県立歴史館 長野県内の遺跡

<http://www.npmh.net/site/index.php> (二〇一五年四月一〇日閲覧)

東京都遺跡地図情報インターネット提供サービス（東京都教育委員会）

<http://tokyo-iseki.jp/map.html#> (二〇一五年四月一日閲覧)

早稲田水稲荷神社

<http://mizunarinet/index.html> (二〇一五年五月一日閲覧)

福島県文化財センター データベースまほろん

<http://www.mahoron.fks.ed.jp/search.html> (二〇一五年五月一〇日閲覧)

（千葉大学国際教養学部、国立歴史民俗博物館共同研究者）
（二〇一五年七月一七日受付、二〇一六年一月二九日審査終了）

The Development of Kunio Yanagita's Interest in Field Studies and the Turning Point in His Life : Focusing on His Three Archaeological Artifacts and His Life in the First Decade of the 20th Century

WADA Ken

This paper examines the archaeological materials collected by Kunio Yanagita to deduce the context of his collecting practices and correlate them with his academic interests. In particular, the focus is on three ancient artifacts he allegedly obtained in Japan. They seem to have been added to his collection in the first decade of the 20th century (hereinafter referred to as “the '00s”). It corresponded to the time when he developed an interest in field studies while working on his early trilogy: “Tōno Monogatari (The Legends of Tōno),” “Ishigami Mondō (Dialogue on Ishigami),” and “Nochi no Karikotoba no Ki (A Record of Boar Hunting).” The '00s were also the decade when he went through various life transitions, such as graduating from university, finding employment with the Ministry of Agriculture and Commerce, becoming an adopted heir, and getting engaged to be married. According to the labels on these three artifacts, they came into his possession while he was on a lecture tour around Japan for the Industry Association or while he was serving as a lecturer of agro-politics at Waseda University. He seems to have collected these three archaeological materials as reference information for his research activities in the '00s. During this period, he exchanged 34 letters with Kyōko Yamanaka and others for “Ishigami Mondō,” worked on the study of the Thirteen Mounds, and collected archaeological artifacts on a trip to Sakhalin while working for the Ministry of Agriculture and Commerce. Although the '00s were the time when Japan was involved in a major transformation of international relations through the Russo-Japanese War, the Japan-Korea Convention, and the annexation of Korea, Yanagita was developing an interest in domestic issues (the anthropology and history of the Japanese archipelago), rather than engaging in foreign affairs (diplomatic activities) as a government official. Thus, the archaeological materials collected by Yanagita were considered as evidence that he developed an interest in field studies as a young adult in the '00s.

Key words: Interest in field studies, the first decade of the 20th century, adopted heir, early trilogy, lectures for the Industry Association